

日頃の教育について

情報・メディア工学科 吉田 俊之

平成22年度から「7連覇」させて頂いた。優秀教員の称号を頂くに当たっては「日頃の教育について」と題するレポートの提出が義務付けられているが、4年前に既に「本報告については、いよいよ書くことがなくなってしまった」と書いており、ここに至っては本当に書くことがなくなってしまった。以下、過去のレポートと多少重複することをお許し頂きたい。

小職は、担当する講義すべてに「講義内容に完全に沿ったテキスト」を作成している。情報3年後期の「画像処理」を例にとると、A4サイズで付録を含め188ページ程度の冊子で、これを簡易印刷・製本して1000円程度で頒布している。毎年どういう理由で優秀教員に選んで貰っているのか、投票時の学生さんのコメントを見ると「テキストが解り易い」とのご意見が多い（「安くて助かる」とする向きもちらほらあるが）。ちゃんと読んで勉強してくれているということで率直に嬉しい限りであるが、ここはもう一歩掘下げてみたい。

どれも200ページ弱のテキストである。これ「だけ」を読んで理解できるはずがない。ということは、「テキストが解り易い」という評価は、講義を聞いた後でレポート問題を解いたり試験勉強をする際にテキストを読み返すと「解り易い」ということなのだろう。つまり、「講義 + テキスト」トータルの評価であって、「テキスト単体」の評価では恐らくない。

さて、昨今は「反転講義」が話題になっているが、小職は「反転講義用の教科書」＝「自習用の教科書」は800ページは必要では？と思っており、200ページ程度のテキストを使って「予め自習し理解しておくように」指示するのは相当無理があるように感じている。

全世界に販路がある英語の教科書とは異なり、日本語の教科書はマーケットが限られているため「分厚い教科書」は出版できないと聞く。確かに、英語の教科書では、ページ数の制約を越えて丁寧に書かれたものが多い一方、日本語の場合は説明が簡略化され、それ単体では解り難い教科書が多い。すなわち、「反転講義」をやるには、まずは自習用の丁寧な教科書を準備する必要があるように思えるが、国内の商業ベースに乗る教科書として出版するうちは、これは不可能である。「私家版テキスト」であってもなかなか難しい（そもそも簡易製本では無理）。であれば、反転講義は、例えば「講義ビデオの配信 + 旧来のテキスト」のような形態にする等の工夫が必要であるが、よく考えてみると、これは「講義室で講義を聞か、家のネットで講義ビデオを見るか」の違いだけのように思える。

ということで、小職は折衷案として「半転講義」を心掛けています。

1. 私家版テキストに沿った講義を行ない、
2. 講義後、演習問題を当該テキストを参考に解いてレポートとして提出
3. 必修講義の場合は、次週の講義冒頭に「前回の内容の小テスト」を課す

という要領で、学生さんの負担は決して軽くなく、しかもレポートや小テストが不合格の場合は「当該講義回は欠席」とする等、合格基準も甘くはない。「反転講義」ではないため、「まあ半転講義くらいか？」と思っている次第であるが、7年連続で優秀教員に選んで貰っているため、自称「半転講義」も悪くないのでは？と思っている。少しでもご参考となれば幸いです。